



分けあうこと、分かちあうこと

取材・文／鈴木朝子

コワーキング・シェアオフィス運営 坂本純子さん 株式会社バクチャー代表

頼むな」と告げられた。先生は、坂本さんがためらうたびに「おまえならできるよ」と語りかけた。両親の言葉は、今も坂本さんを支える。

成績も良かった。300人以上の学年で、たいてい一桁台を維持していた。それでも、自己評価が低いことは変わらなかった。

「1位2位になれる人ってやっぱり天才で、自分は努力して取れるところまでは取るっていう気持ちだっただけです。3つ下に能天気な弟がいて、しっかりしていて勉強もできるお姉ちゃんというのを全うしなければいけないと思いついていた」

ひとりぼっちの転校生

坂本さんにとって忘れることのできない数カ月が中学3年生の時に訪れる。

両親が埼玉県狭山市に家を購入し、引越したと同時に転校することになった。都心から離れた転校先では、幼稚園から中学校までをほとんど一緒に過ごしてきた子どもたちでコミュニティが完成されていた。東京から来た成績優秀な少女——の存在を、周囲の子どもたちはどう受け容れて良いか分からなかった。

初日に話しかけてくれるクラスメイトは皆無、自分から声をかけてみても会話は一往復で終わった。音楽や家庭科などの授業では広い校内を移動しなければいけないのに、いつも取り残されて迷子になった。助けられる先生もいなかった。

そんな環境を、心配をかけたくなくて両親には話さなかった。学校に行かなければ高校に進学できない、そう思っただけで不登校にもならなかった。



「下を向いて歩いた通学路、今でも憶えています。せつかく早く登校しても自分の席に座っているだけで、そこから見ていた教室の景色も」

そんな状態が続いた数カ月ののち、坂本さんは自分から状況を打開しようと考えた。

「こうなりたいという理想があるのなら、自分から動いて、だめならまた違う方法を探すということをしなければ、いつまでも物事を人のせいにして生きていくことになる」

懸命に話題を探し、何度も話しかけていくうちに、状況は次第に変化した。周囲が戸惑っていたただけだということもわかったし、友達もできた。「それにしたって理不尽だった」と笑いつつ、その時のことが今の自分の原点かもしれないと言う。

人はひとりでは何もできない

女子高校への進学とともに、苦しかった中3の時代に別れを告げる意味もあって、

ただただ目立つことの嫌いな、真面目な少女だった。幼稚園生の頃、近所の人に挨拶することが苦手で、けれど生真面目な性格から挨拶しないこともできず、「人に会いませんように」と思いながら歩いていた。小学校では日直が回ってくるのが怖くて、コンピを組む男の子が入院してしまった途端に学校に行けなくなった。お祖父さんの米寿のお祝いでは、孫を代表して花束を渡す大役をまかせられ、恥ずかしくてうつむいたまま手渡した。

「やるなら堂々とやったほうがカッコイイのに、と思うんですけどね」

2014（平成26）年に起業し、いくつかの事業拠点を飛び回り、人が集うあたたかい場所をいくつも生み出している坂本純子さんは、今その内向的な少女を振り返って笑う。

「出し惜しみ」と言われた小さな芽

1974（昭和49）年、東京都田無市（現・西東京市）に生まれ、間もなく中野区に転居した。両親は娘を、難しいことに挑戦したりリーダーを務めたりすることよりも、きれいにご飯を食べる・丁寧に話す・人に挨拶するなど「きちんと」生きることを大切にしようとした。

自分に何か特別なことができるなどと考えたこともなかった坂本さんの潜在的な力を最初に活かそうとしたのは、小・中学校時代の先生だった。小学校高学年クラスの担任の先生は、何かに取り組む坂本さんにたびたび「出し惜しみするなよ」と声をかけた。中学1年生の夏休みには、地元の夏祭りでも偶然会った先生に「後期の学級委員、

坂本さんはこれまでやらなかったことに挑戦しようと考えた。部活動紹介でミュージカル部が上演した「アニー」に感動、希望者が殺到したために行われたオーディションで、自分を一生懸命アピールして入部を果たした。高校2年生の時には「掠奪された7人の花嫁」で主役のアダムを演じた。「どんなことでも、これからは自分を主張してきちんと生きていこう」と思っていました。マンモス校だったからすぐに埋もれてしまおうし、違うと思うことは違うと言って、自分の力で変えられることは変えていこうと」

校内には派閥があり、仲間外れもあちこちで起きていた。課外活動に取り組む時には、グループ分けで外れた人と組んでいけば面白くないことをしようとした。お弁当をひとりで食べている人がいれば、隣に移動して一緒に食べた。ひとりぼっちの転校生だった記憶も手伝っていた。

「いろんな立場が理解できたから……人が好きなんですよね。それに、どんな理由があってもひとは寂しいものです。大勢のなかで誰かがひとりぼっちという状況は作りたくないかった」

坂本さんはいまでも、街中で困っている人を見かけると通り過ぎることができない。電車内で路線図を見つめている外国人には必ず声をかける。重そうな荷物を抱えた高齢の女性に「大丈夫ですか？」と声をかけて「大丈夫です」と返されてしまい、「質問なんてしないで、持ちますよ」と言えなかったなんて反省した。ある時には、地面に寝転がって駄々をこねる小さな子どもと困り果てたお母さんを見かけ、「抱っ

こしてあげる！おばちゃんの子になるよよ！」と手を伸ばした。

「それはもうピツと泣きやみましたよ。いきなりおばちゃんの子って（笑）」

結局、人はひとりでは何もできない。声をかけることで何かが動き始める。誰かが何かを始めることで、その動きが周りにも広がっていく。坂さんの心にあつたその発想は、自身もまだ無意識のところ、のちに設立する会社の事業となるワークキングの精神とつながっていた。

大きく外れた未来予想図

高校卒業後、とくにならいたい職業もないまま大学に行こうと考えたのは「真面目だったから」で、興味があった経済・経営系の学部を受験した。しかし四年制大学のすべてに落ち、大きな挫折感を抱いたまま短期大学の社会学部に進学する。短大での勉強そのものは楽しかったけれど、気持ちはすさみ、家庭では19歳で初めて反抗期になった。

「逆らったこともなかったのに、何もかも父が悪いみたいな気持ちになってケンカばかりしていました。父娘の諍いばかりで母も泣いて。毎日飲み歩いたり、家に帰らなかつたりしました。家のことも、自分のそれまでのことも、みんな嫌になつてしまっていた」

そして坂本さんは、アルバイト先で出会った年上の男性と結婚することになる。おなかには赤ちゃんもいた。予定していた大学への編入も取りやめ、坂本さんはご主人の地元である千葉県千葉市で生活を始めることになる。

「できちゃった結婚」に対する世間の目は今より遙かに厳しかったし、ずっと優等生だった坂本さんの人生の展開は、周囲はもちろぬ本人にとつても想定外だった。1990年代後半、学生時代の友達は大学に進学して企業に勤め、ボーナスで海外旅行に行ったりブランド品を買ったりして豊かな生活を楽しんでいるように見えた。

すでに折り合いの悪かつたお父さん、得する術はなく、「あなたは、最後は自分で決めるんでしょ」と理解とあきらめが半分半分のお母さんの言葉に背中を押されて、坂本さんは家を出た。

「でもそこで」と坂本さんは言う。「そこで、真面目な自分、真面目を演じていた自分を全部捨ててくることができまして。おなかにいる子どもをあきらめて、大学に行つて、いいところに就職して……という表向きに綺麗な道よりも、これは自分で選んだ道なんだと決めることができた」



お母さんたちのためのイベント企画

21歳で母親になつた坂本さんを、試練が襲う。生まれたばかりの赤ちゃんが体調を崩し、生後10日に大病院で手術を受けることになったのである。命にかかわるものではなかったものの、家族が皆駆けつけた。そのなかに、仲違いしたままのお父さんもいた。久しぶりに会話を交わす娘に、お父さんは心のうちを伝えた。

「そんなふうに、代わつてやりたいって、自分の命よりも子どものことが大切だつて思う気持ち、分かつただろ。おれもそう思つたんだ。おまえを二十歳そこで茨の道に出すのが、父親としてどうしても嫌だつたんだ」

翌年、次男が生まれる。社会に出て働きたかつたものの、長男の体が弱かつたこともあり「今は子育てする時期かな」と坂本さんは考えた。そこで、子どもと地域に役立つことに取り組んでみようと思いつく。子育て中のお母さんたちが、地域や団地・社宅といったコミュニティの垣根を越えて集まることのできる場を作ろうと考えた。定期検診で会うお母さんたちに声をかけ、年子の育児の合間に作つたチラシを渡した。市内のコミュニティセンターの大広間を借り、母親同士が交流できる会を数回にわたつて企画した。

「ここで出会つて友達を作つてくれたら嬉しいし、一度だけでも来て好きな話をして、元氣になつてくれればいいなと思つてやっていました」

一方でお金を稼ぐことも必要で、次男が小学校、のちに生まれた三男が幼稚園に通

い始めたところに坂本さんはパートタイムで仕事を始めた。ホテルサービスの派遣会社に登録し、フロントやクローク、客室サービスなどを担当した。

ホテルのあと、自宅に近いスポーツ施設のフロントで勤め始め、数年後に東日本大地震が起きた。人的被害は少なかつたものの、坂本さんの自宅や勤務先があつた地域では液状化が深刻だった。配管異常からスポーツ施設は一時的に営業を停止し、パート・アルバイトから順に「有事により自宅待機」が言い渡された。事実上の解雇に近かつたという。

「株式会社パクチー」誕生・「SHITSURAI」オープン

そして2013年の年末、坂本さんはパソコン教室とともに運営していた男性から独立を持ちかけられた。彼は勤めていた会社でパソコン教室運営と並行してウェブ制作部門も担当しており、その顧客を引き継いで新しいウェブ制作会社を立ち上げる計画だった。

坂本さんはこの提案に乗り、スポーツ施設でやはり一緒に働いていた20代の男性も誘つて、3人で起業することになった。代表取締役も引き受けた。

拠点である千葉市には、中小企業のサポートや起業支援を行う「ビジネス支援センター」があり、坂本さんたちはそこを訪れて起業相談を重ねた。そして2014年7月、同センターを仮の拠点として、ウェブ制作をメイン事業とする「株式会社パク



チー」の登記が完了する。

ウェブ制作という事業から、事務所はどうしても必要なものではなかつた。カフェなどで集まつて打ち合わせして、顧客先を訪問し、スカイプなどでやり取りをすれば、案件を進めることはできる。それでも坂本さんたちは事務所を持ちたいと考えた。「人ありき」を社是に掲げた会社として、人が集まる場所はどうしてもほしかつた。

「でも、駅から近くて立派な事務所を借りたとしても、ウェブ制作の仕事が増えるわけではなくて、良い物件は経営的にはマイナスでしかない。そこで、ワークキングの存在を知つたんです」

本社をワークキングスペースにすることで、収入を確保できるとともに、事務所は人が行き交い、出会う場所になる。それは、坂本さんには願つてもないことだつた。人と人が出会い、小さなつながりがやがて大きな動きになつていく——学生時代や子育

1 千葉市ビジネス支援センター CHIBALABO (チ巴拉ボ)。千葉市産業振興財団運営による「千葉市ビジネス支援センター」のなかでスタートアップ・起業支援に特化した施設。千葉市の起業支援を拡充させていくために事業構想段階や起業間もない起業家に対してアドバイスを行い、連携・協力して新たなビジネスの創出を目指すための施設。運営受託は立候補と審査で行われ、受託時の(株)パクチーは創業2年目の若い会社だったが、スペースを使って個人事業主フオーアップや中小企業診断を行つていたことから信頼を得た。起業時にここで登記したこともあり「恩返しができる嬉しい」(坂本さん)。

2 ワークキングとは、さまざまな仕事を行う個人がワークスペースを共有する働きかたのことで、1990年代に米ボストンでこの動きが生まれ、2000年代のシリコンバレーで具体化されたと言われている。ワークキングスペースの主な利用者はフリーランスや起業家であるが、最近では組織に勤めながら作業拠点として利用する人も増えている。

ての真つ最中に坂本さんがさまざまな場所
で実践してきたことが、いよいよ大きな舞
台で行われることになった。

3人は、当時コワーキングが盛んだった
大阪を視察した。訪れたコワーキングス
ペースは、いずれも単に「作業するための
スペース」ではなく、かといって「居心地
の良いカフェ」とも違った。そこには確か
に人の存在が感じられた。漠然とした理想
像を追いながら、坂本さんたちは千葉に
戻って物件探しを本格的にスタートした。

千葉市の中心部にある大きな駅の近くを
条件に探した。ビジネスエリアである海浜
幕張駅は、大手企業が会議室を運営してい
るケースが多いため入り込めず、歴史の古
い住宅地である稲毛駅では理想の物件が見
当たらない。そこで、坂本さんの地元であ
る稲毛海岸駅周辺に絞ることになる。そう
して出会ったのが、稲毛海岸駅徒歩3分・
商業施設が同居するビルの3階のスペース
だった。オーナーが年に数回のみ貸スペー
スとして貸し出していた場所で、場の利活
用に関心のあったオーナーは坂本さんたち
の申し出を快諾した。

2014年11月、株式会社バクチャーは本
社を現在の場所に移し、コワーキングス
ペース事業をスタートさせた。物件のオー
ナーがつけていた名前——利用してくれる
人のために整える「設置する」という意味
の「SHI-TSU-RAI(しつらい)」を
坂本さんが気に入る、そのまま引き継いだ。

地域に足りないものを

最初の10日間、お客さんはほとんど来な
かったと言う。コワーキングという名称が



間はほぼなかったと言う。それでも、
「SHI-TSU-RAI」の名前はさまざま
まなかたちで広がり、同時にバクチャーの事
業も拡大していくことになる。

奪い合うのではなく、分かち合う

2016年3月、起業時にお世話になっ
た起業支援施設「CHIBA-LABO(チ
バラボ)」の運営を受託、翌4月には「み
んなの経済新聞ネットワーク」運営元と
提携し、ビジネスとカルチャーを中心に地
元・千葉を楽しむ情報を伝える『千葉経済
新聞』を発刊した。2017年11月には、
百貨店「そごう千葉店」内でふたつめのコ
ワーキングスペース「コトコトコワーキン
グスペース」⁴を開設した。そごうの担当
者が、コワーキングスペースを営む埼玉県
の大手企業を訪れたところ、「それは地元
の人がやらなければならない。うちではな
く、坂本さんのところに行ってください」



浸透しておらず、宣伝しても「これなに？」
という反応ばかり。スタートアップ支援
働く女性の支援、起業家の輩出などをピ
ジョンに掲げていたが、「そもそもこのあ
たりに起業家いなかった(笑)」。フリーラ
ンスはいたが、都内にシェアオフィスを借
りているケースが多かった。会社の少ない
住宅地——そもそもターゲットの少ない場
所で事業を始めたことに、坂本さんたちは
ようやく気付いたという。

そこで、とにかく人に来てもらうことを
考えた。オープンを祝って身内でパー
ティーを開き、知り合いを招待した。地元
を大切にするために、ビル間近にある大型
スーパーマーケットではなく個人商店の酒
屋さんにお酒を発注した。ビールサーバー
が運良く(?)爆発し、酒屋さんの代表が
謝罪に訪れたタイミングで「なにか一緒に
やりませんか」と持ちかけた。店主を講師
としてワイン会を主催し、日本酒の会・焼

と話してくれたことから始まったと言う。

そして、千葉県からの提案で、2017
年に県内の廃校の利活用プロジェクトに取
り組むことになる。幾つかの廃校を視察し
たのち、勝浦市立清海小学校の旧校舎を
「シェアキャンパス清海学園」⁵としてオー
プンさせた。閉校間もない時期で建物の状
態が良く、目の前に海岸が広がる立地と勝
浦市の熱意が大きな決め手だったと言う。

「SHI-TSU-RAI」で学んだよう
に、スペースの特性を打ち出して人を呼ぶ
ことに努め、地方活性化のために働く人の
ワークスペースを提供し、起業家向けのセ
ミナーのほか、キャンプやバーベキューな
どのイベントも開催している。2019年
夏には、盆踊り大会を予定。「ようやく地
域の方々に来ていただける」と坂本さんは
話す。この事業にはとくに、坂本さんの社
会に対する思いが色濃く反映されている。

「今、社会は良いほうにも悪いほうにも
変わっていると思います。そのなかで、完
璧が素晴らしいわけじゃない、上を目指す
ことだけが一番というわけじゃない、とい
う発想が生まれてきている。働き方も、正
規に雇用されて規定時間をきちんと働ける
人がベストなのではなくて、時間の半分を
介護や育児に取られた人も、自分の仕事に
自信を持てるようであればいい」

この思いは、コワーキングスペース運営
の根底にあると同時に、地域活性化に関す
る事業に取り組む原動力でもある。

「弱くていいし、ダメなところがあつてい
い、たくさんできなくてもいい。互いに認
め合って力を持ち寄ることが、人が少なく
なるこれからは重要だと思います。人が減つ

耐の会などの開催に展開させていった。人
との間に垣根を作らず、相手の魅力を見つ
け引き出すことに長けた坂本さんの性格
が、人と人を次々につないだ。会に訪れた
人たちが、同じ趣味を持つ人と出会ったり
同じ職種の人と語り合ったりする場面がい
くつも生まれた。

子育て世代が多い地域でもあり、保育園
の仲間パーティーができる場所を探して
いるグループに貸スペースとして事務所を提
供したこともある。ケーキやピザを持ち込
んで、小さい子どもや親たちが楽しそうに
過ごす様子を見ながら、坂本さんは思った。

「あ、違った、と。思って。スタートアッ
プ支援なんてガチガチに考えていたけれ
ど、まず地域に足りないものを提供して貢
献することがこのスペースの役割だって気
付かされました」

主催するイベントとコワーキングの相乗
効果が生まれることは、スタートから3年



ていくのは止められず、地方に住む場所を
作って移住・定住を促しても、結局人を奪
うことになっている。住む場所として人を
つなぎとめてしまつたら、力があつてパイ
(母集団)を抱え込む場所か過疎地のどちら
かになつてしまう。それでは争いの構図……
強い・弱い構図になつてしまう。そ
うじゃなくて、たくさんの方がそれぞれ
の価値を上げるために努力して、人がいろ
いろな地域を移動できる、つまり人を奪い
合うのではなく分かち合う社会になつたら
いいと思うんです。そのために自分のでき
ることを、模索し、見つけ、実践してい
たいと思つています。ひとつひとつ」

3

「みんなの経済新聞ネットワーク」(運
営元:花形商品研究所)は、地域の文化・
経済を伝えるウェブメディアで、「シブ
ヤ経済新聞」からスタートした。それ
ぞれの地域の「新聞」を、地域のウェ
ブ制作会社や広告代理店などが運営元
と提携し、取材・制作を行っている。

4

そごう・西武による百貨店そごう千葉
店(旧千葉そごう)が、若い世代を中
心に物品所有への関心が薄れる社会を
背景に対応し「コト消費」を重視した
体験型テナントを中核に、2017年
に別館(1993年建設)をリニューアル
した。この一環としてコワーキン
グスペース誘致が計画され、大手コワー
キングスペース運営会社を介して(株
バクチャーが依頼を受けた。

5

JR外房線「鵜原」駅徒歩15分の場所に
位置するシェアキャンパス。旧勝浦市
立清海小学校(1873年開校)の校
舎を利活用するかたちで、セミナー、
イベントを行っている。レジャー施設
としても使われ、運動会、キャンプ、
大人数でのバーベキューなどを行うこ
とができる。「水曜日のダウンタウン」
(TBS系列)のロケ、「淳の休日」(ロ
ンドンブーツ1号2号・田村淳さんの
企画)の運動会開催の場としても活用
されている。

DATA

SHI-TSU-RAI コワーキ
ングスペース
千葉県千葉市美浜区高洲3-14-1
1和紅ビル3F
JR京葉線 稲毛海岸駅から徒歩2分
営業時間:10時~23時(日曜日・
祝日休)
シェアキャンパス清海学園(旧
勝浦市立清海小学校)
千葉県勝浦市鵜原1-42-2
JR外房線 鵜原(うばら)駅から
徒歩15分
営業時間:11時~18時(不定休)
コトコトコワーキングスペース
千葉県千葉市中央区新町1001
番地
そごう千葉店 JUNNU(ジュン
ヌ)館内
JR千葉駅南口から徒歩5分
営業時間:10時~20時

月 日 曜日 直		出張関係									
氏名		用件	出張先								
		年休	特休								
		病休									
提出物関係		在籍児童一覧表									
日	内容	提出先	係	在籍数	欠席数	家庭数					
				学年	男	女	計	男	女	計	実数
				1	7	2	9				5
				2	7	8	15				6
				3	11	5	16				13
				4	10	9	19				14
				5	12	5	17				16
				6	8	7	15				15
				計	55	36	91				69
				総計							



a. シェアキャンパス清海学園。海岸線まで徒歩 0 分の立地。勝浦市ではこれまで、少子高齢化・人口減少の課題に向き合うかたちで、雇用の確保やU・I・Jターンによる人口の増加を目指してきた。2015年には「勝浦市まち・ひと・しごと創生総合戦略」が策定され、市は千葉県と連携のもとで企業の誘致に取り組んできた。この一環として、清海小学校の活用事業者を募り、これに手を挙げたのが坂本さんだった。校舎の一部改修に伴って、躯体の改修工事は市が受け持ち、コワーキングやシェアオフィスのリノベーションは総務省の「ふるさとテレワーク推進事業」の補助金を活用してパクチャーが行った。改修にあたっては「地域の記憶を宿す学校の雰囲気を残す」(坂本さん)ことをとても大切にされた。(参考:機関誌『マネジメントスクエア』<ちばぎん総合研究所>2018年7月号) 1階の旧職員室の黒板には、清海小学校最後の在校生の人数を書いた文字が今も大切に残されている。

b. 「SHI TSU RAI」の4周年を祝って集まった利用者の方々と。プライベートでは、息子さんたちがそれぞれ23歳、22歳、19歳に。3人とも、人を愛し人に愛されることのできるお母さんの背中を見て育った。